

第1部 外国人クリスチャンの結婚生活

第1章 マルティン・ルター（1483〜1546）とその結婚生活



修道士ルター

（徳善義和
『マルティン・ルター』
教文館より）

まず始めに、宗教改革者として有名なマルティン・ルターとその妻カテリーナの結婚生活を紹介したい。ルターは1483年、ドイツのアイズレーベンで生まれた。彼は大学で法律を学んでいた。ある日、突然落雷に遭い、死の恐怖にかられ、その場で修道士になることを誓った。そしてその誓いどおりに修道会に入り、神学博士にまでなった。1517年10月31日、彼は自分の確信することを95ヶ条にまとめ、ヴィツテンベルグの城の門に貼り出した。これをきっかけにして、ドイツからヨーロッパ中にプロテスタント宗教改革が始まった。

このように、ルターはもともと修道士であったので、結婚というものは考えていなかった。その頃、ルターの著作を読み女子修道院の生活に疑問を持ち、そこを脱出してルターの元に身

を寄せていた修道女が9人いた。ルターはそれぞれに落ち着き先を世話したが、最後まで残ったのがカテリーナであった。

カテリーナは貴族の家の出であったが、幼い頃に両親を失い、女子修道院に預けられ、修道女として生きてきた。結局ルターは、1人残ったカテリーナと結婚することになった。この時、ルターは42歳、カテリーナは26歳であった。だから、ルターは彼女に恋をして結婚したのではない。彼は、結婚後こう言っている。

「私は狂わしいほどの愛に夢中になったわけではありません。しかし、私が妻を見るに、彼女をフランスやベネチアと交換したいとは思いません。なぜなら彼女も神が私に与えてくださった賜物ですし、他の女性に比べたら欠点が少ないかもしれません」

それが、1年たつと、「私は彼女をクレススの全財宝とも取り替えようとは思いません」と言い切るほど、この結婚を喜んでいる。つまりルターは、結婚してから恋に陥ったと言つてよいであろう。多くの若者は、恋をしてから結婚するが、結婚後急速に冷めてしまうのと対照的である。ルターも『卓上語録』でこう言っている。「世の中には、燃え上がるような愛を持って結婚するけれども、結婚した途端に愛が冷え切ってしまうような人たちが沢山いる」

それに対してふたりの結婚は、「愛がいよいよ育っていくような結婚」だったと言えるであろう。このように、ふたりは愛し合い、尊敬し合う結婚生活を送った。カテリーナが病気になる、死にかけて時、ルターは「ケーテ、私を置いて死なないうれ」と叫んだ。カテリーナは夫のルターを尊敬し、「博士殿」と呼ぶことが多かったが、ルターは彼女の意見を大切にされた。

ルターが自由意志の問題をめぐってエラスムスと論争していた時、彼が沈黙していた時があった。その時彼女はこう励ました。「あなたは何か書くべきです。多くの人があなたから学びました。だから反論すべきです」このことばに励まされ、ルターはペンを執った。

ルター夫妻は、なかなかのユーモアの持ち主であった。彼は論争の時、相手の名前をからかって呼んだことも時々あった。ルターは、うっすの性質を持っていたらしく、時々落ち込むことがあった。ある時はその落ち込みが激しく、部屋の隅で頭を抱えて座り込んでいた。そこにカテリーナが、黒い喪服を着て現れた。それに気付いたルターはびっくりして、「誰が亡くなったのか」と尋ねた。するとカテリーナは、「あなたが一番大切な方、キリストが亡くなったのでもなければ、あなたがそんなにふさぎ込むこともないでしょう」と答えた。すなわち、今日はルターの心の中のキリストの葬式であると言ったのである。彼女のこのことばに、ルターは落ち込みから解放され、我に返ったとのことである。

ふたりの間に生まれた子どもは、全部で6人、3男、3女であった。当時の感覚としては、決



妻カテリーナ

(徳善義和
『マルティン・ルター』
教文館より)

して多い数ではなかった。その中で成人するまで育ったのは、4人だけであった。長女マグダレーナは13歳で、次女マルガレーテは生後8ヶ月で亡くなった。ルターは、こう言っている。

「よき結婚による結合ほど甘美な結合は、他に存在しない。子供の死がそのことを証明する。それがいかばかり悲しいことであるか、私自らこれを経験した」

ルターがいかに関心の結婚生活を喜び、子どもたちを大切に思っていたかがよく分かる。ルターは音楽の天分があり、有名な「神はわがやぐら」など多くの賛美歌を作った。彼はクリスマスの時をはじめ、妻や子どもたちと楽しく賛美する時を持った。

彼の家の食卓は、家族以外にも多くの学生たちが加わり、実に、にぎやかであった。学生の誰かが修士や博士の学位を取ると、ルターは「今日は誰々君のお祝いだ、100人のお客さんだぞ」と平気でカテリーナに言ったようである。さぞカテリーナは、やりくりが大変だったことであろう。そのために彼女は、色々な家畜を飼い、果樹園の管理をし、ビール造った。ル

ターはカテリーナがドイツ一のビールを造ると、よく自慢していた。当時カトリックの神学者や指導者は、プロテスタント宗教改革者が結婚したことを墮落とみなし、激しく非難した。それに對し、ルターはこう反論した。

「私は全世界のすべての教皇の神学者よりも富んでいる。なぜなら私は満ち足り、そのうえ結婚によつてすでに3人の子どもを与えられたが、教皇の神学者たちは子どもを与えられていないからである」

また彼は、結婚生活の意味や恵みについて、次のように言っている。

「子どものために苦しまず、互いに愛無き夫婦は、それはもはや人間ではない。すべてをあげて信頼でき、またそのような人によつて子どもをつくることのできる配偶者を持つことは最大の恵みである」

ルターがどんなにカテリーナを信頼し、彼女との結婚生活を喜び、誇りに思っていたかがよく分かる。この文章に続いてルターは、「ケーテよ、あなたはあなたを愛する夫を持つ。あなたは

女王である」と称えている。

ルターは1546年、生まれ故郷のアイスレーベンで、62歳で召された。そしてカテリーナは1552年、53歳で召された。私たちは世界の歴史を変えた宗教改革者ルターのことを知っている。しかしその大きな働きは、よき妻カテリーナを抜きにして語ることはできない。カテリーナの臨終のことばは、「私はコートにふさがついているように、キリストにしっかりと縫い付けられている」というものであった。

参考文献

- ① マルティン・ルター『卓上語録』植田兼義訳 教文館 2003年
- ② 徳善義和『マルティン・ルター 生涯と信仰』教文館 2007年
- ③ R・ベイントン『道―ベイントン来日講演集』新教出版社 1982年

第2章 ジャン・カルヴァン（1509～1564）とその結婚生活



「カルヴァン像」
渡辺禎雄 作

（新教出版社刊
『キリスト教綱要』
ジャケット装画）

ジャン・カルヴァンの名前は、宗教改革史上不滅である。不朽の名著『キリスト教綱要』や多くの聖書注解書を著し、スイスのジュネーブを拠点として、宗教改革を押し進めた。

第1章で取り上げた宗教改革者マルティン・ルターとは、色々な意味で対照的である。彼らの性格や運動の進め方もそうだが、彼らの結婚生活もまたそうであった。

ルターは、その妻カテリーナとの結婚生活を喜び、子どもたちにも恵まれた。一方カルヴァンの結婚生活は短く、子どもは与えられなかった。カルヴァンというと、肖像画を見ても感じられるように、非常に意志的で、禁欲的なイメージが強い。彼が生涯独身を通したと考えている人もあるいはいるかもしれない。

カルヴァンは、1509年北フランスのノワヨンで生まれた。その頃ルターはウィッテンベルグ大学の教授に就任した。カルヴァンはパリなどで学び、26歳で『キリスト教綱要』を出版した。彼は静かな学究生活を送るつもりであったが、不思議な神の導きでジュネーブにおける宗教改革に導かれた。しかし最初の改革運動は市の当局者と衝突し、失敗に終わった。追放されたカルヴァンは3年余りシユトラスブルグで、フランス人の亡命者のための教会の牧師として奉仕した。

このシユトラスブルグ滞在中の1540年、カルヴァンは31歳の時に2人の子連れの未亡人イドレット・ド・ビュルと結婚した。プロテスタント宗教改革が進んでいく中で、改革者たちは次々と結婚した。結婚をすることそれ自体が、聖職者の結婚を禁止するローマ・カトリック教会に対する挑戦であり、勝利であると考えられるような風潮があった。そのために、実際に結婚はしたものの、その結婚生活をもてあましていような現実も見られた。

結婚前にカルヴァンが考えていたのは、「より主に献身することができ結婚」であった。彼は結婚の前年に友人にあてた手紙の中で、結婚について次のように書いている。

「私が妻の中に何を探し求めているかは、ご存知のとおりです。私は女性の美しさに一度取り憑かれると、あばたもえくぼになるような恋愛狂気族の一人ではありません。私を虜にする女性の魅力といえは、貞節、思いやり、慎み深さ、経済観念、忍耐ということですよ。」

最後に、私の健康に気を配ってくれることを望んでいます」

彼の求めていたものは、かなり高い標準であり、それに似合うような女性はなかなか居なかった。しかしカルヴァンは、自分の結婚相手として有能な家政婦を期待したわけではなかった。そのような実的な助け手以上に、内面的な対話の相手として妻を求めたのであった。

結局彼が選んだのは、イドレット・ド・ビュルという未亡人であった。彼女とその夫は、フランスから逃げてきた再洗礼派であった。再洗礼派は、宗教改革の運動の中で最も急進的な運動で、各地で迫害された。彼ら夫婦はシュトラスブルクでカルヴァンの指導を受け、再洗礼派から改宗した。その後、夫のジャンは病死した。カルヴァンは未亡人として2人の子を抱えて苦勞しているイドレットの中に、純粋な信仰とすぐれた家政の賜物を見てとったと考えられる。

かくて彼らは結婚した。カルヴァンは結婚により、2人の子どもの父親になった訳で、実の父親のように彼らを可愛がった。しかし、彼らの新婚生活は次々と試練に襲われた。6週間後に、彼とイドレットは病気になった。カルヴァンはこの試練について、友人に次のように書いている。「実際、私たちの結婚生活が幸福でありすぎないように、主は節度を越えないよう、私たちの喜びを初めから抑えて下さいました」

いかにもカルヴァンらしい受け止め方である。結婚生活をただ手放して享楽しないよう、そして、迫害の中にある人々を思うようにとの配慮もそこにかがえる。

次にやってきた試練は、ふたりの間に与えられた子の死産であった。その頃彼らはジュネーブに住んでいた。出産の日、カルヴァンは友人に、「私の妻は危険な陣痛で苦しんでいるので、私は気がありません」と告げている。結局ジャックという名をつけられていたその子は、未熟児でほんの短時間息をしただけで召されてしまった。その悲しみを、彼は友人にこう書いた。

「愛する息子の死によって、確かに主は私たちに大きな苦痛に満ちた傷を与えられました。しかし、主は私たちの父です。主は主の子どもにとつて、何が善かご存知なのです」

さらに、こうも書いた。「主は私に独り息子をお与えになりましたが、これを取り去られました。しかし、私にはキリスト教世界に1万人の子どもがおります」

このように彼は、この大きな試練を信仰によって乗り越え、神からの慰めと希望とを受けている。しかしイドレットは、この後も病気がちの生活になった。彼女の健康の回復を願いつつも、カルヴァンは最悪の事態を心配し始めている。彼は友人に次のように書いた。

「私たちの願いとは反対の何かが起こるのではないかと、私は恐れています。主が私たちに對して憐れみある態度を見せて下さいますように」

しかし、彼女の病気は進行して行き、1549年に召された。カルヴァンは、超多忙な生活の

中で最後まで付き添った。彼女の連れ子の世話の約束、キリストによる恩寵、永遠の生命についての希望を妻に語った。そして悲しみつつも祈り、静かに息を引きとっていく彼女を看取った。

妻を失ったことは、彼にとって大きな打撃であった。彼は妻の死について長年の友人フアレルにこう書き送った。

「もしも主が天からその御手を差し伸べてくださらなかつたらば、私はこの不幸によつて完全に打ちのめされていたことでしょう。主は倒れた者らを起こし、弱い者らを強め、疲れた者らを生き返らせてくださることをその務めとしておられます」

また、もうひとりの友人にこう書いた。

「妻の死は、私には極めて残酷な出来事でした。私はできる限り、悲しみを和らげようと努めております。……私はこの上ない伴侶を失いました」

彼にとつて、イドレットの存在がどんなに大きなものであつたかがよく分かる。この後カルヴアンは、もう再婚しなかつた。彼の身辺事情から言えば、宗教改革者として、いよいよ多忙を極め、助け手を必要としていた。彼が再婚否定論者であつたとは知られていない。彼の結婚について、日本におけるカルヴアン研究の権威者である渡辺信夫の言葉を引用してしめくりとしたい。

「彼は、また一回限りの結婚に固着する純情派でもありませんでした。もう結婚にはコ

リゴリだと思ったのでもありません。しかし、結局彼は、再婚できなかつたのです。ひとたび本当の結婚を知ったカルヴァンは、もう一度本当の意味で結びつくべきたましいを、ついに見出すことができなかったのでしょうか」

参考文献

- ① 渡辺信夫 『カルヴァン』 清水書院 1968年
- ② 渡辺信夫 『カルヴァンとともに』 創文社 1973年
- ③ ベルナル・コットレ 『カルヴァン 歴史を生きた改革者 1509—1564』
出村彰訳 新教出版社 2008年